

平成 26 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：2014年4月～2015年3月

※今年度の年次報告書は担当者の名前、メールアドレス、添付資料を除き、HP等で公表
します。また、ユネスコスクールの質の確保の観点から、報告書の内容が一定の基準に満
たないもの、報告書が2年連続して未提出の場合には、ユネスコスクールの認定取消を勧
告させていただくことがありますので、あらかじめご了承ください。

1. 学校概要

学校名 愛知教育大学附属岡崎小学校

種別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 高等学校 中高一貫教育
 教員養成 技術/職業教育
 特別支援学校 その他 ()

住所 〒444-0072
愛知県岡崎市六供町八貫 15

E-mail : aoi@op.aichi-edu.ac.jp

Website : http://www.op.aichi-edu.ac.jp/

児童生徒数：男子 315 名 女子 306 名 合計 621 名
 児童・生徒の年齢 6 歳～ 12 歳

2. 担当者 ※公表しません

3. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか ()

4. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

防災

◎実践1

4年社会科

「残していきたい 安全で心の安らぐ場所を ～生まれ変わる伊賀川桜堤～」

ア ねらい

伊賀川桜堤の河川改修工事について調べることをとおして、防災対策により安全な暮らしを守ることや、環境保全により心の安らぐ場所を守ることがよりよいくらしにつながっているといった見方や考え方を広げることができる子どもにしたい。

仲間とかかわるなかで、伊賀川桜堤の河川改修工事をしている愛知県や水害対策を考えている岡崎市、伊賀川周辺や市内に住む人々の思いに迫り、環境保全と防災対策の価値を考え、伊賀川桜堤のあり方について判断・決定できる子どもにしたい。

イ 内容

今でも桜の木が多く残っている伊賀川の稲熊橋周辺を見学し、校区総代会長さんから伊賀川の桜の木について話を聞くことで、桜の木が岡崎市や地域の人々にとって、大切であるという意識を高める。その後、桜の木が多く切られている伊賀川の石神橋周辺を見学し、桜の木が伐採されている部分に注目することで、なぜ桜の木がないのか疑問を感じる。「工事のために桜の木がじゃまだったのかな」「桜の名所の木を切ってまでする工事なのかな」など気づきや疑問を子どもたちのなかでかかわらせていくことで、「岡崎の名所である伊賀川の桜の木をどうして切ってしまったのかな」という問題意識をもちひとり調べへと進んでいく。

問題意識をもった子どもたちは、桜の木を切った理由を、聞き取り調査や伊賀川の見学をもとに追究していく。子ども相互のかかわりの見通しをもてるようにするために、ノートや学習記録を掲示し、友だちの追究に対して共感している部分と疑問に感じている部分に2種類の付箋を付け意見交流をする。また、伊賀川の河川改修工事について探っていくと、2008年の岡崎集中豪雨や、伊賀川氾濫に伴う水害が見えてくる。河川改修工事にかかわっている西三河建設事務所の担当の方と一緒に伊賀川の工事現場を実際に見たり、地域の人から話を聞く場を設定すること



昔の伊賀川について聞いたよ

政に対する見方や考え方を広げていくことができる子どもになってほしいと願って実践に取り組んだ。

ひとり調べでは、伊賀川の工事をしている人や周りに住んでいる人に

インタビューする子ども、西三河建設事務所へ行き工事のことについて聞き取りに行く子ども、岡崎市役所へ行って工事以外の取り組みについて聞き取りを行った。ひとり調べの後のかわりあいで、「桜の木は地域の人にとって大切なものである」「人々の命を守りながら工事を進めてほしい」と考える子どもたちの姿が見られた。そして、今よりもきれいで安全な川にしたいと考え、自分たちの意見を伝えようと西三河建設事務所に意見文を書いた。このような学習を通して環境保全と防災対策に対する考え方を深め、自分に何ができるか対象に進んでかかわろうとしている子どもの姿が見られた。

◎実践2

3年算数科

「何日分でも正かくに求めるよ そなえる水の代金 ー2けたをかけるかけ算ー」

ア ねらい

必要日数分の様々な備蓄品の代金を求める活動のなかで、10のかたまりを意識した計算と筆算とを結びつけることで、筆算のしくみを理解し、かける数が2けたになっても筆算を使うことのよさに気づき、様々な解法に取り組める子どもにしたい。

筆算の操作の意味を明らかにしたり、形式化できる筆算のよさを感じたりするなど数学的な思考力を育み、2けたをかけるかけ算について考え合うなかで、かける数やかけられる数によって適切な計算方法を判断・決定できる子どもにしたい。

イ 内容

昨今の災害のニュースや社会科の防災に関わる学習から、災害の恐ろしさを知ることで、事前にどんな準備や対策が必要か話し合う。そのなかで、避難方法、水や食料、連絡手段や防災グッズの必要性に目が向く。それぞれが家族に提案する備蓄の計画を立てるにあたり、1日に必要な水を購入したり、救助が来るまでの日数を考えることにより、全体でいくらかかるのかを正確に求めたいという問題意識が生まれる。

問題意識をもった子どもたちは、被災して困ること上位の水について考え始める。1日分の水の代金×日数で求められることに気づき、日数が1けたの場合は2けた×1けたとなり、既習事項を使って求め始める。2週間、1ヶ月などかける数が2けたになったときに既習事項で求めることができず、正確に求めようと追究を進める。

追究が進み、缶詰などの品物についても必要な費用を計算で求めていくとする。様々な数値を扱うなかで、筆算のもつどんな数字でも計算することができるよさに気づいたり、かける数の数値を分類して考えることにより、数学的な思考をはたらかせ、たし算や計算の工夫の方が速く正確に求めることができたりする場合もあることに気づき、場合によって適切な考え方を判断・決定することができる。

1日分 98 円の水を1か月分（31日分）準備するときにかかる代金を求めるために、



缶詰も準備するよ。いくらになるかな

子どもたちは、31を4週間と3日と分けたり、10日分の3倍と残り1日分と分けたりするなど、2けたをかけるかけ算の筆算のしくみに迫っていく姿が見られた。

また、保護者から「備蓄品を確認したら、すべて賞味期限が切れていた。東日本大震災の記憶が薄れてきた今、家庭でできる防災対策について見直すよい機会となった。」との意見をいただき、家庭の防災対策について見直すことができたようだ。

◎実践3

4年総合的な学習の時間

「見つけたよ みんなの命の守り方 これで安心 附小安心・安全マップづくり」

ア ねらい

自分の遊びや生活を安全の視点から見つめ直し、安全意識を高め、安全に過ごすための方法を考え、行動できる子どもにしたい。

仲間と協力して「附小安全・安心マップ」をつくることを通して、自分の行動を振り返ることで、自分の安全について見つめ直すことのできる子どもにしたい。

イ 内容

本校と他校の4月のけがの状況をグラフ化し、子どもたちに提示する。グラフを比較し、子どもたちは、本校のけがの多さに驚く。また、低・中・高学年別のけがの人数を示すと、低学年のけがが多いことにも目が向く。危機感をもった子どもたちは、低学年のけがが多い原因を考え、けがを減



危険な場所を伝えたいな

らしたいという思いをもつ。そして、様々な情報をマップで表してきた子どもたちだから、「附小安全・安心マップ」をつくって、下学年の安全を守りたいという思いや願いをもつことができる。

思いや願いをもった子どもたちは、下学年の安全を守るために、調べてわかったことや、気づいたことをマップに書き込んでいく。マップができたら、下学年に見てもらおうことで、わかりにくいところを聞き、もう一度自分たちのマップを見直す。また、けがを減らすための具体的な行動を、書き加えることに気づく子どももでてくる。そこで、かかわり合いの時間を設定し、仲間の活動のよさに目を向けたり、情報を共有したりして、マップを見つめ直す。けがを減らすためにできる具体的な行動を書くことに気づいた子どもたちは、より安全を守るマップを作りたいという活動をさらに進めていく。

「附小安全・安心マップ」には、けがの起きている場所にシールや印をつけるだけでなく、気をつける方法まで具体的に書いた。下学年の子にとって、わかりやすいマップを作り、呼びかけも行った。活動を進めていくなかで、同学年のけがが多いこと知り、下学年の子のけがを減らすだけでなく、自分たちの行動も見つめ直さないといけないことに気づいた。けがを減らそうと呼びかけをしてきたが、自分たちの学年のけがが多くてはいけないと思い、下学年のお手本となれるように、廊下を走らない、ホールでふざけないなど小さなことからやっていくことで、け

